

20年の回顧

山田良之助*

学問の進歩に伴つて、その専門分野を深く掘下げてゆくと、一つの学問分野の中にも幾つかの細分された専門分野が生れて来る。これは学問の進歩に伴う必然の傾向であるといえよう。そしてこれらの細分された専門分野に関係する人達が相集つて、小は研究グループを形作り、大は学会にまで発展することは当然の帰結である。しかしグループが余りに細分化されると一見細分されたグループがお互に関連する他のグループと連絡を密にして、時には合同研究グループを作ることも必要になつて来るであろう。このようにして学界は細分化され、また総合化されてゆくものといえる。

昭和12年わが日本金属学会が創立せられたのは日本の金属に関する学術の発展に伴う必然の結果といえよう。日本鉄鋼協会は当時既に相当古い歴史をもち、健全な発展を遂げておつたのであるが、たゞそれだけでは会員の研究発表機関としては十分ということはお出来なくなつていた。尤も当時既に東北大学金属材料研究所には月刊雑誌として「金属の研究」が10年余の歴史をもつており、京都大学冶金教室には「水曜会誌」があるなど個々の大学、研究所には研究発表機関をもつていたところもあつたが、全国的の学会組織としては日本鉄鋼協会があるのみであつた。周知のように既にイギリスには鉄鋼関係の学会と金属関係の学会とが両立して互に世界に重きをなしておるので、わが国にも金属に関する学会を創設したいという声が各方面にあがつて来た。筆者の記憶するところでは、鈴木益広氏と筆者が最初に日本金属学会創設のことで相談を受けたのは昭和10年頃石田四郎氏からであつたと思う。勿論全国的の学会を作りたいが、東北大学の金研の方に連絡をとつてくれないかということであつた。他にもそういう話合をしておられた方々があつたようである。そこで早速金研に連絡をしたところ岩瀬慶三氏から返事があり、金研は本多光太郎先生はじめ所員各位は大賛成であるという。特に「金属の研究」を廃刊して全面的に新しい学会に合流するよう決意

したということであつた。石田氏、黒田正夫氏、堀口貞雄氏や鈴木氏、筆者等が会の創設につき種々討議を重ね、又金研からは岩瀬氏その他が時には参会せられて準備の打合せを進めたが、会の事務所を何処にするかについてお互に了解点を見出すことが出来ず、一時創設は危ぶまれるに至つたのである。そこで改めて主として金研が全国に呼びかけて全国的の学会を作るよう準備を進めることとなつた次第である。本多光太郎先生は切角「金属の研究」を廃刊してまで新しい学会を作るべく決意せられたので全国主要の大学、研究所に呼びかけられ、また岩瀬氏その他金研の所員各位の御努力もあり、東京にあつては鈴木氏の絶大なる御援助があつて、多数の発起人の御同意が得られ漸く昭和12年2月、東京の当時の鉄道協会の会館において創立総会が盛大に開催せられるに至つたのである。そして会長本多光太郎氏、副会長西村秀雄氏、同眞島正市氏として会は発足した。

発会式後の記念晩餐会の席上長岡半太郎先生のテーブルスピーチに「...私が大学の物理の学生時代に、先生に山川健次郎先生がおられた。ある日、山川先生は物理実談の中、金属の比重の測定を課せられた。そして先生は机の引出から綿に包んだ金属を2種類とり出されて、それらの比重を測定するよう命ぜられたのである。山川先生が大切にしておられた金属の一つは白金であり、他はアルミニウムであつた。山川先生の言われるには、この2種類の金属は何れも極めて貴重なものであるから、実験を終つたならば決してなくさないように、必ず返すようにと言われた。このアルミニウムは今日では工業材料として広く使われておることは申すまでもないが、一般に家庭用品としてまでも用いられているではないか。今後金属に関する学問が、理論は勿論、その応用にまで、このようなテンポで進歩発達をすることを確信し、ついではこの日本金属学会の発展を祈るものである...」と。その後戦争のため一時停滞したとはいえ、今日までの金属界の進歩の跡を迎れば、長岡先生の予言は正に適中しているものといえよ

* 社団法人日本金属学会前会長

う。金属物理では転移論の発展その他目覚ましいものがあり、チタニウム並びにその合金、ジルコニウムの製造などの新しい金属の発達、また球状黒鉛鋳鉄の理論並びに種々の製造法、耐熱合金、真空鋳造や粉末合金の発達、熔接技術の発達など金属工業界の発展は異常なものがある。さらに鉄鋼その他一般に金属の生産設備の改善に伴う生産技術の進歩と生産量の急激の増加、オートメーション化による品質の向上と生産単価の引下げ、非破壊検査の発達など、技術面での進歩も実に偉大なものがある。

これら各方面の発達は申すまでもなく、理論の探究が根本をなすものであつて、今後益々理論の発展に努力を払うべきは勿論、更に理論と実際方面との連絡を密にすることの必要を痛感する次第である。

こゝで再び学会の歴史を顧みると、学会設立当初から、事務所は仙台と東京とに置き、関西その他の地域には支部が置かれている。本部事務所は今日まで金研内に置かれているが、東京事務所は言わば苦難の連続であつた。鉄道技研から浅草の金属会館に移り、これが戦災に会うと科研に移り、そして今日の東大冶金教室に移つてようやく安定したといえよう。

学会創設に当り本多会長は外国の学会が行つていのように、講演申込と同時に全論文を提出し、これを会員に予め配布して、講演当時の討論に便利なようにしようという構想をもつておられた。創設当初で幾何の論文が集るかも懸念せられたので討議の結果、会長の意志通りにはならなかつたが、今日行われている B 講演が、その構想を実現

したものといえよう。分科会単位に講演が集中せられていることも会員に便利な企画であると思ふ。

日本金属学会賞の制定も本多会長の主唱によつて出来たものであつた。世界中の金属学者を対照としたものであるが、ただ戦争のためと、そして戦後の貨幣価値の低下とによつて、受賞者は僅か 6 名に止つていることは何としても遺憾な次第である。その金メダルのデザインは表に本多先生の像を浮刻にし、裏は日本金属学会賞と受賞者の名を入れるようになっていゝ。彫刻家堀進二氏のデザインになるもので、こゝに同氏に対し改めて敬意を表するとともに、受賞の一日も速かに復活出来る日の来ることを祈るものである。

学会は講演会や会誌の発行の事業の外、分科会の論文、講座の発行等を行つて来た。創立十周年記念事業としては金属便覧の発行や、地方講演会の開催等を行つて来た。本年は恰も 20 周年に当る。この度の記念事業としては別の企画に基く便覧の発行や、また地方講演会も行うことになつていゝ。本部並びに支部役員と、関係方面の絶大な御協力とによつて会の資金面も益々安定化しつゝある。会の今日の発展を思うにつけ、過去 20 年は実に早くも過ぎ去つたの感が深い。会の設立を主唱せられた各位、並びに設立に際して多大の労苦をおしまれなかつた各位、更には今日まで会の発展に寄与せられた役員並びに会員に深甚の敬意と謝意を表し、併せて今後のわが国金属学界と工業界との一段の発展と、これとともに日本金属学会の益々健全な発展を遂げることを衷心より祈るものである。